



地域に根ざした女子ラグビーの チーム展開と横浜市のスポーツ支援

よこかわ ひでお
横川 秀男

YOKOHAMA TKM 代表／戸田中央医科グループ副会長・COO／
医療法人横浜未来ヘルスケアシステム理事長

よしおか やすお
吉岡 泰男

特定非営利活動法人 YOKOHAMA TKM スポーツ&ヘルスケア理事長

女子ラグビーチーム YOKOHAMA TKM (以下、YOKOHAMA TKM) は、2021年8月8日に創設10周年を迎えた。医療法人がチームの運営母体となる国内初の女子ラグビーチームとして、横浜市戸塚区で産声を上げた。戸塚を拠点とする医療法人横浜未来ヘルスケアシステムは、戸田中央医科グループ(以下、TMG)を構成する主要法人の一角を担う。TMGは神奈川県を含む一都四県に29の病院と6の老人保健施設のほか合計120の関連事業所を展開する。地域トータルヘルスケアの実践を理念に掲げ、15,000名を超える職員と6,357のベッドでエリアの医療・介護・保健・福祉を担い、グループ一体となった経営を展開している。

今回は YOKOHAMA TKM 創設者でありチーム代表でもある、医療法人横浜未来ヘルスケアシステム 横川秀男理事長(兼 TMG 副会長・COO)に話を伺った。また女子ラグビーや NPO 法人の現況、さらに末尾の特別コメントについては吉岡泰男氏にまとめていただいた。

1. YOKOHAMA TKM の設立と 病院再建の関係性

横川氏は、1993年から戸塚共立病院の再建に携わってきた。当時の戸塚共立病院は医師が少なく、経営が厳しく、組織として脆弱であった。この病院の再建に取り組むなかで、横川氏は高校時代に経験したラグビー部再建との共通項を感じていたという。

横川氏：自分が麻布中学に通っていた中3の終わり頃、麻布高校のラグビー部には数人しか部員がおらず、いつ潰れてもおかしくない状況でした。そ

こで他部の仲間と共にラグビー部に入部し、高校1年の春からチームを再建していきました。ラグビーをはじめて経験する人が感じてしまうタックルの恐ろしさを、そう感じさせないようにマインドを少しずつ変えていく。そして、次に「どのようにして勝つのか」という観点を考える。そのときには、柔道で都のベスト4に入る同級生をフルバックにした形で点を取るなど、いろいろなチャレンジを行いました。

これは、横川氏が病院再建について語った「良い医師を集め、気持ちを揃えていく。まずは救急を断らずに診られる医療チームを育て、そしてその病院ならではの強みを出していく」というスタイルと共通するものであり、病院内でもラグビー精神“One for All, All for One”を標榜してきた。

また、横川氏は昭和大学医学部進学後もラグビー部キャプテンを務めるなどラグビーに携わってきたが、病院再建の過程でも、こうしたラグビーが繋ぐ縁として、医学部・歯学部・薬学部の仲間、そしてラグビーではライバル校であった慈恵医大、順天堂大学、東京医大等の様々な仲間が支えてくれたという。

「どこかで恩返しをしないといけない」という思いから、病院経営に従事しつつ、夜間や休日には昭和大学医学部ラグビー部の監督も行ってきた。このような生活が18年ほど続いた2010年秋頃、神奈川新聞で日本体育大学ラグビー部の柴田紘三郎監督の取組みを知ったという。

横川氏：日体大は女子ラグビーチームを40年近く続けてきているのですが、我々のような医療業界もその従事者は70%以上が女性であり、こうした日



【横川秀男氏のプロフィール】
 1957年2月19日生まれ、東京都出身。麻布中学・麻布高校・昭和大学医学部卒業。心臓血管外科医、戸田中央医科グループ副会長・COO、医療法人横浜未来ヘルスケアシステム理事長としてこれまでに病院の再建・設立に努め、病院経営に従事する。一方、麻布高校1年生でラグビーを始め3年間プレーし、昭和大学医学部に進学、ラグビー部に入学し、6年間プレー。その後、昭和大学ラグビー部の監督を6年間務め、現在はOB会会長に。また、医療法人で初となる女子ラグビーチーム「YOKOHAMA TKM」を2011年に創設し代表を務める。現在は一般社団法人横浜TKMに運営母体を変え、本年で創設10周年を迎える。

体大の取組みは素晴らしいな、と思ったのです。

実はTMGには長らく強豪ソフトボールチームがあり、横川氏はその顧問にも従事してきた。そうした意味では、女子スポーツチームの運営ノウハウを持っており、ソフトボールのチーム運営方法を踏襲していけば、女子ラグビーチームを作り上げることができるのではないかという思いに至ったのである。

横川氏：まずはメンバーを揃えるところから始めました。最初はもちろん紹介です。女子ラグビーはチームも多くなく、ラグビーを続けたくても大学までで止めざるを得ない女性も多かった。そうした選手の受け皿として、女子ラグビーの実業団チームは非常に貴重な存在です。

同時に練習場が必要でしたが、これにも縁がありました。ある給食事業を行う企業が関東に進出した際、最初のクライアントがTMGの老人保健施設でした。その後、この事業者が横浜FCのスポンサーとなった折に、私たちも横浜FCのオフィシャル・メディカルパートナーになったので、お願いをしたところ、女子ラグビーのために横浜FCのグラウンドを貸してもらえることになりました。

こうしたさまざまな縁が重なり、2011年の夏にYOKOHAMA TKMはスタートすることとなった。創設時のメンバーは6名。ソフトボール経験者の集まりからラグビーの練習は始まった。2年目には菅平高原での夏合宿を経て、15人制大会（合同チーム）に初参加、そして初の公式戦（横浜市女子セブンズ大会）に出場している。そして今日に至るまで、15人制で26名、7人制で17名の代表候補選手を輩出し、国内女子ラグビーにおいて中核を担う存在に成長している。YOKOHAMA TKMは、チー



【吉岡泰男氏のプロフィール】
 慶應高校にてラグビーを開始、2、3年次に全国高校大会に出場、慶應義塾大学では2年次に全国大学ラグビー選手権初優勝。オクラホマ州立大学留学時にラグビー部創部。伊藤忠商事㈱入社後、オランダ駐在時代にデン・ハーグ&ロッテルダムの地元クラブで2年連続リーグ優勝を達成。爾後、伊藤忠商事㈱ワシントンD.C.事務所長、日本政策投資銀行・総裁秘書、ワタキューセイモア顧問などを経て、現在（一社）TMG本部特別顧問。

ムとしても、15人制では第27回 OTOWA カップ関東女子ラグビー大会・優勝（2016年）、7人制ではキャピタル・ウイメンズ・ラグビーシリーズ大会（2020年）で優勝するなど着実に進化の道を歩んで来た。

YOKOHAMA TKMが創設されて10年、現在は2014年から始まった太陽生命セブンズというリーグ戦で日々戦いが続いているが、この10年でチームを取り巻く環境はどのように変わったのだろうか。

横川氏：医療法人の我々がチームを作ったということで、これが呼び水となり、様々な企業が女子ラグビーチームを作る流れができました。YOKOHAMA TKMが一つのロールモデルとなった実感はあります。もちろんTMGは女性が多い職場なので、チームと職場をリンクさせることができたのですが、企業によっては、メンバー全員を自分の職場で雇用するのが難しいという企業もあります。とはいえ、そもそも大学卒業以降の受け皿がなかったなかで、こうした女子ラグビーチームが各地にできて、リーグ戦も行える環境が出来あがっていったのは本当に良かったです。ラグビー協会等の関係者から「スタイルを確立してくれて助かりました」と言われることは、望外の喜びでもあります。

2. 女子ラグビーの現況

さて、ここで女子ラグビーの現況を少し整理しておきたい。日本女子ラグビーの世界ランクは現在（2021年4月時点）12位、そして東京オリンピック（7人制）でのメダル獲得を目指している。

図表1 女子ラグビー世界ランキング (2021/4現在)

1位	イングランド		8位	アイルランド	
2位	ニュージーランド		9位	スペイン	
3位	カナダ		10位	ウエールズ	
4位	フランス		11位	スコットランド	
5位	豪州		12位	日本	
6位	米国		13位	南アフリカ共和国	
7位	イタリア				

出所：World rugby union

2022年開催へと順延された15人制女子ラグビーの世界カップ（ニュージーランド大会）では本大会でのベスト8入りが日本ラグビーフットボール協会の掲げる目標である。

日本国内における女子ラグビーは、1983年に初めて単独チームが創設、その後、1998年に日本女子ラグビー連盟が設立された際、参加したチームは15であった。それが昨年での（2020年3月）登録は72チーム、女子選手5,082人をを超えるまでに増え、連盟設立時の姿から大きく変貌してきている。（なおラグビーを国技とするニュージーランドにおける女子ラグビー選手は31,035人（2020年時点）、NZラグビー人口の約20%を占めている）

こうして女子ラグビーの競技人口が増えるなか、上述の太陽生命セブンズというリーグ戦も2014年からスタートしているところである。

3. YOKOHAMA TKM が考える「地域とクラブチーム」の関係

次に地域、ここでは横浜市との関係を考えたい。ラグビー・ワールドカップでは横浜が決勝会場となったが、その流れとYOKOHAMA TKMの関係をどう捉えているのか。

横川氏：横浜市自体に女子ラグビーのチームがあま

りなく、特にメンバーがまとまって動けるチームはYOKOHAMA TKMしかありませんでした。またラグビー・ワールドカップ自体、開催決定当初はあまり盛り上がりには欠けたということもあり、横浜市から「一役買って欲しくないか？」という話に来るようになりました。そこでYOKOHAMA TKMの黄色いジャージを着たメンバーがいろいろな場所・媒体に顔を出すようになったのですが、そのことで地域の皆さんにラグビー自体の存在が伝わりやすくなったと思います。

そして、地域への還元という意味では幾つかの方向感がある。

横川氏：まずチームメンバーから医療・介護の人材育成をして社会に貢献する、という点はこれからもやっていきたい根幹となる部分です。それに警察、消防に関するキャンペーン、また「子供たちにラグビー教える」などさまざまな啓発活動への協力があります。子供たちも経験が一番重要ですし、スポーツに苦手意識がある子供も女子スポーツ選手と交流することでトライしてみようとなるケースも本当に多いようなのです。

また、戸塚には日立のソフトボールチーム、横浜FCの女子サッカーチーム、そしてYOKOHAMA TKM、と女子スポーツのトップチームが3つあり、一緒に活動に参加させてもらうことも多いの



写真1 チーム写真
(YOKOHAMA TKM 提供)

ですが、こうした特徴は活かしていきたいところ
です。

そして何よりも「地域での連帯感の醸成」に貢
献したいという思いがあります。ラグビー精神と
いうのは、仲間の支えあいが根幹ですが、戦う姿
を見るなかでそうしたものを感じてもらい、「助
けあう、支えあう」という意識の大事さを伝えて
いきたいと思います。女子ラグビーの選手たちが
母親になり、その子供たちにもこうした精神も受
け継がれ、その2世代がまた新たな選手層を生
む、という流れが地域にできてくるとありがたい
と思います。

この戸塚区、そして横浜市で、ヒトを育て、そ
のヒトがエリアに良い影響を及ぼす、という流れ
をスポーツが生み出し、レガシーになっていく、
という形ができればよいのではないのでしょうか。

現在 YOKOHAMA TKM は医療法人の運営か
らクラブチーム型に少しずつ形を変えつつありま
す。立ち上げ10年はこれまでの形でもよかったの
ですが、医療介護に従事しない方からこのチーム
に入りたいというニーズが増えてきたためです。
今後はチームの形態を変えつつ、進化をしていき
たいと思っています。

そして、YOKOHAMA TKM の過去10年間を通
じた功労を礎として2020年11月12日、横川氏は
NPO 法人 YOKOHAMA TKM スポーツ&ヘルス
ケアを横浜市戸塚区に立ち上げた。YOKOHAMA
TKM は創設当時より乳がんの早期発見・治療を目
的とするピンクリボン運動、小学生向けのラグビー
教室開催、戸塚区での清掃活動、防犯・防災キャン
ペーンへの参加など、地元での多彩な社会貢献活動
を行ってきたが、このNPO 法人設立に伴い、女子
ラグビーをシンボルとするスポーツ育成と普及を基
軸とした活動を行っていく予定である。地域社会と
関与し、One for All, All for One の精神を体現して

いかんとしている。

【特別コメント1】ラグビーが生み出す価値

慶應大学医学部在学中は體育會蹴球部（ラグ
ビー）の主将を務め、現在は研修医（済生会宇都宮
病院）として研鑽を続ける古田京氏は、大学トップ
レベルのラグビー経験者として医学的な観点を踏ま
えた社会貢献に強い関心を示してきた。古田氏から
本稿掲載によせてラグビーが生み出す価値につき以
下のようなコメントが寄せられている。

『ラグビーが地域や地域住民に与える価値は3つ
ある。第一に、地域にラグビーチームがあること
で、地域住民にとって試合観戦の機会が増えるとい
うことだ。調査した研究論文の中には、スポーツ観
戦をするだけでホルモン分泌が増えるといった健康
への効用を認めており、ラグビー観戦が健康面で直
接的な良い影響を与える価値が指摘できる。第二
に、ラグビーチームが保有する練習グラウンドを有
効活用できることである。地域住民へ開放すること
により運動習慣の機会が創りやすくなる。未病の概
念が、生活の中に自然な形で織り込まれる方法を日
本的な予防策と捉え、ラグビー選手が子供から高齢
者を相手にする運動教室などは地域貢献として望ま
れる活動であろう。第三に、本件でいえば、医療法
人がラグビーチームを運営する相乗効果があろう。
病院を含めた医療施設が地域社会におけるハブとな
り、ラグビーと医療機関が街づくりの中心となる。
街全体の活性化に繋がる潜在性については、スイス
のバーゼルFCの活動が好事例である。今後は、こ
ういった街づくりを通じて、コロナ禍を通じ希薄と
なった、人と人のつながりが一層見直され、人と人
のつながりを大切にするコミュニティの価値が重要
視される可能性がある。』

小学校訪問事業

【特別コメント2】YOKOHAMA TKMと横浜市の協働

横浜市で、東京2020大会を含むスポーツ振興全般を所掌する西山雄二横浜市市民局スポーツ統括室長から、YOKOHAMA TKMと横浜市との協働について、以下のコメントが寄せられている。

『YOKOHAMA TKMを運営する医療法人横浜未来ヘルスケアシステム様は、地域医療提供やスポーツ分野での活動を通じ、女性アスリートの活動機会創出や雇用促進、地域貢献活動など、さまざまな分野で活躍されており、この功績から、令和2年度の横浜市男女共同参画貢献表彰推進賞を受賞されるなど、横浜市政に多大な貢献をいただいています。

その活動の象徴的な存在である女子ラグビーチーム YOKOHAMA TKM の皆さんには、ラグビーワールドカップ2019に向けた機運醸成イベントへの参画やラグビー体験へのご協力のほか、地域でのスポーツ教室の開催や小学校訪問事業など、大会レガシーの創出に向け、ワンチームとなって取組みを進めていただいています。

また、横浜を本拠地にする13のトップスポーツチームが集まる「横浜スポーツパートナーズ」(2020年10月発足)の一員として、他のトップスポーツチームとともに、ラジオ体操PR動画への選手出



(横浜市提供)

演、小学校保健体育読本「たいいく」への選手メッセージ掲載など、スポーツの魅力発信にも協力いただいています。

さらに、地域団体と連携した防犯啓発活動や新型コロナウイルス感染症対策PR活動といった広報活動のほか、地域清掃活動などにも積極的に参加いただくなど、まさに市政全般にわたり、ご支援をいただいています。

横浜市では、ラグビーワールドカップ2019、東京2020大会の両大会開催を一過性のものとせず、更なる飛躍の契機とするためにも、今後も、YOKOHAMA TKMをはじめとしたトップスポーツチームの皆さんとともに、スポーツ振興、スポーツを通じた共生社会の実現、地域活性化などを進め、スポーツ都市横浜を実現していきたいと考えています。』